

平成 21 年 3 月 20 日現在

研究種目：若手研究（B）  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18720080  
 研究課題名（和文） イギリスの福祉国家への転換とその文化への影響——ヴァージニア・ウルフを中心に  
 研究課題名（英文） The Transformation of British Culture and Society towards a Welfare State and its Influence on Virginia Woolf and other Modernist Writers  
 研究代表者 河野 真太郎（京都ノートルダム女子大学・人間文化学部・講師）  
 研究者番号： 30411101

## 研究成果の概要：

本研究課題は、ヴァージニア・ウルフを中心とするイギリスのモダニズム文学を、帝国の縮小から福祉国家へ、という歴史の流れを参照し読み替えることをめざした。資料収集と研究が進捗するに従って、帝国縮小と統一的国民文化への志向が、想定していたよりも早い時期（1910年代）にさかのぼりうることが判明した。モダニズムを歴史化しつつ、また英国史そのものも再考に付すという意味で、当初目指していた成果は十分に達成されたと考えている。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	300,000	3,600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：英米文学、モダニズム、大戦間期

## 1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の段階において、英国モダニズム文学と帝国主義（とその縮小）との関係

について、英米においては新たな研究の動向が生じ始めていた。その代表は Jed Esty, *A Shrinking Island*(2004)であったが、帝国の

縮小と国民文化の再編成という観点でのモダニズム文学研究はまだ萌芽的な視点であり、研究の質量ともにまだ不十分であった。したがって、「研究の目的」に述べられているような視点のもとにできるだけ多くの作家・批評家の作品を読解し、新たなモダニズム文学の歴史観を醸成する余地があった。

## 2. 研究の目的

本研究は、英国のモダニズム作家であるヴァージニア・ウルフ(Virginia Woolf)の小説作品とその他の著作を軸としつつ、第一次世界大戦と第二次世界大戦の間の時代(現在のイギリス文学・文化研究では「大戦間期(interwar years)」と呼ばれる)の文化の布置、そして作家や批評家たち自身が「文化」そのものについてどのような考察を行ったかを明らかにすることを目的とした。

大きな歴史の流れをみると、大戦間期は19世紀後半の不況、そして第一次大戦の結果により、イギリスが帝国とそれを支える自由主義から、小さな福祉国家へと転換した分水嶺の時期である。本研究における「文化の布置」とは、そのような歴史の変動に従って、文化の領域で生じた様々な変動のことを言う。さらに細分化すれば、それはイギリス国内での階級の流動化とその再編、ナショナリズム的な傾向の出現、そしてその両者に関連して、「文化」に対する自意識的または人類学的関心という形を取る。特に1930年代前後には、イギリスにおいて「文化」に関する多くの言説が生産された。研究の軸となるウルフのみならず、T. S. エリオット(T. S. Eliot)、E. M. フォースター(E. M. Forster)、ジョン・クーパー・ポウイス(John Cowper Powys)、「英文学」という学問の創設に与ったリーヴィス夫妻(F. R. and Q. D. Leavis)、さらにはウルフと同じブルームズベ

リ・グループの一員とされるケインズ(John Maynard Keynes)などが注目され、その著作を研究する必要がある。

研究の最終的な目的は、文学から経済学までのこれら「文化」に関する言説を広く背景として、ウルフの作品に新たな読みを加えることである。したがって、自由主義的拡張主義から福祉国家主義への転換という歴史のテーゼを広く検証し、しかる後に個々の文学作品を分析する必要がある。研究費交付期間内には、上記の著述家の著作(一次資料)を渉猟し、歴史の見取り図を作成する作業を行う予定であった。同時に、大戦間期を対象とした最新の文学研究・歴史研究・社会学的研究(二次資料)の調査も進める予定であった。もちろん、これらは予備作業であり、ウルフの作品読解も並行して行う。

## 3. 研究の方法

本研究は基本的には文献研究である。研究課題に関連する一次資料と二次資料の収集と読解、その成果の口頭・論文の形での発表を行った。もちろん研究の進捗状況を確認するため、積極的に発表を行い、フィードバックを得るよう努めた。

## 4. 研究成果

雑誌論文②と図書①においては、イギリス戦間期の文学研究者・批評家のQ. D. リーヴィスに焦点を当て、その著書『小説と読者大衆』が帝国の縮小と国民文化の再編成、さらにはアメリカ合州国という新たな「帝国」との相克のうちに生みだされた著作であることを明らかにした。

雑誌論文①と学会発表⑤においては、ウルフの『ダロウェイ夫人』が「イングリッシュネス」の言説といかなる関係にあるのかを考察した。帝国縮小期における国民文化の再編

において、田園主義言説と都市言説がいかなる交渉を行ったのかが重要な論点として浮上し、通常都市小説とみられる『ダロウェイ夫人』がいかなる形で「都市の田園化」をめざし、新たな国民文化に向けた動きを示していたのかが明らかになった。

図書①の所収論文「都市の農夫——ホープ・マーリーズと遊歩者のユートピア」では、これまでほとんど読まれることのなかった詩人・小説家のマーリーズを紹介しつつ、上記『ダロウェイ夫人』論と同様の問題意識で、都市の遊歩文学のうちにある有機体的なものへの郷愁を読んだ。

学会発表④では、イングリッシュネス研究の最新の潮流をマッピングしつつ、E. M. フォスター『ハワーズ・エンド』における国民文化とグローバリズムの相克を論じた。この研究によって、1910年という早い時期に、すでに帝国の縮小・国民文化の再編成・グローバリズムの萌芽形態との交渉が行われていることが確認された。

学会発表③では、批評家で小説家のレイモンド・ウィリアムズの作品を論じた。これは主に文学理論一般に関する研究である。

学会発表②ではウルフとイタリア未来派を比較しつつ、それらが共有する「群衆の包摂」という問題規制を指摘した。都市群衆を包摂することと、新たな国民文化を編成することとの関係、そしてリベラル個人主義というその後支配的になるイデオロギーの萌芽をそこに読み込んだ。

学会発表①では批評家ウィリアム・エンブソン『牧歌の諸変奏』（1935年）を解題しつつ、そこに見いだされる「超越論的経験論」を論じた。これは、文学理論一般に属する研究である。

以上、研究目的としてあげた全ての作家について研究することはかなわなかったもの

の、帝国の縮小から国民文化へ、そしてグローバリズムとの交渉へ、という図式の有効性が確認されつつ、それが多くの作家に適用可能であり、また時代も遅くとも1910年代までを視野に入れることができると確認された。この歴史観と図式は、イギリス20世紀前半からさらには第二次世界大戦後まで適用可能なものであり、その見取り図をある程度示せたことは大きな成果である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ①河野真太郎「都市と田園のテクノロジー——歩く『ダロウェイ夫人』『ヴァージニア・ウルフ研究』(査読有) 24号, 2007年, 46-60頁
- ②河野真太郎「大戦間の「文化研究」と自由主義イングランドの奇怪な死」『日本英文学会第78回大会 Proceedings』(査読無) 2006年, 140-42頁

[学会発表] (計5件)

- ①河野真太郎「William Empson, *Some Versions of Pastoral*について」新英米文学会, 2008年11月15日, 早稲田奉仕園
- ②河野真太郎「マニフェスト・パフォーマンズ・暴力——ウルフと前衛(芸術)」日本ヴァージニア・ウルフ協会, 2008年7月12日, 青山学院大学
- ③河野真太郎「〈経験〉の時制——*The Volunteers*における未来の考古学」日本女子大学文学部学術交流シンポジウム, 2008年3月22日, 日本女子大学
- ④河野真太郎「『ハワーズ・エンド』とイン

グリッシュネス・スタディーズ」日本英文学会関東支部会第2回大会，2007年9月22日，慶應義塾大学

- ⑤河野真太郎「都市と田園のテクノロジー——歩く『ダロウェイ夫人』」新英米文学会第38回大会シンポジウム，2007年8月26日，国土舘大学

〔図書〕（計2件）

- ①遠藤不比人・大田信良・加藤めぐみ・河野真太郎・高井宏子・松本朗編『転回するモダン——イギリス戦間期の文化と文学』研究社，2008年，135-63頁
- ②武藤浩史他編『愛と戦いのイギリス文化史 1900-1950』慶應義塾大学出版会，2007年，203-16頁

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

河野 真太郎 (KONO SHINTARO)

京都ノートルダム女子大学・人間文化学部・講師

研究者番号：30411101

### (2) 研究分担者

( )

研究者番号：

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：

